

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2018年3月 NO.202



[もくじ]

- 2～3 所作にあらわす…中内真理
- 4～5 地域と展覧会とカタログ—高知県立美術館での七年間を振り返って…川浪千鶴
- 6～7 ロシアの、マトリョーシカとウオッカ以外の話…田原綾乃・高畑慧
- 8～9 子ども食堂の広がりについて…泰泉寺あや
- 10 「アンテナ」にこみちゃんとの出会い…下尾仁
- 11 「“学びの楽しさ”を伝える」ことについて…岡崎正哲
- 12～13 高知市文化振興事業団1月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

所作にあらわす

中内 真理

私は香南市で生まれ育ち、県内外を一人転々とした後、現在は高知市内で家族と愛猫三匹に囲まれて暮らしています。そして、事務職に就く傍ら、家族が経営するカフェの手伝いや、「Marycocolo（メアリーココロ）」という名前で、天然石やパワーストーンと呼ばれるものを使ったアクセサリー雑貨の制作をするなど、三足の草鞋を取っ替え引っ替えしながら日々を過ごしています。

さて、私の三足の草鞋の一つ、「Marycocolo」としてのアクセサリー雑貨制作という所作に照準を合わせてみたいと思います。

私が作るものには、全てのものに天然石やパワーストーンと呼ばれるものを使います。私が扱うも

のは天然のものだけでなく、人工のものや加熱などの加工で着色されたものなど、その材料は多岐にわたります。

天然石などのアクセサリーといえば、その価格はピンからキリまで。一般的には、材料となる石の純度が高いものや希少価値が高いものが高価となります。しかし、私が作るアクセサリー雑貨は、リーズナブルなものがほとんど。これは私が制作をするにあたって

のこだわりの一つでもあります。簡単に言えば、高価な材料＝純度が高い＝不純物が少ない、となるのですが、私が材料として選ぶものは、逆にその不純物がより多く混ざり、材料である石の色や模様などが個性的で、表情がより豊かなものです。そしてそういった材

料は比較的リーズナブルなものが多く、できるだけお財布に優しい作品を作りたい私にとっては、こちらの方が光る原石のようなもの。その日の洋服や気分に合わせて、数ある中から自分だけのアクセサリーを選んでお洒落を楽しむ、小さくてもそんな幸せな「ココロ」を提供できればという思いで、日々の所作を行っています。



元々、私が天然石やパワーストーンに興味を持ったのも、石の表情が一つ一つ違い同じものがなく、とても個性豊かである所に惹かれたのが理由でした。そして好きが

高じ、天然石ビーズなどを取り扱うショップで働いたこともありました。その経験が基になり、自分が欲しい天然石アクセサリーはなかなか売っていない、売っていても高くて手が出ない、というごくごく単純な理由も相まって、私の「表現」である、天然石などのアクセサリー雑貨制作という所作が始まったのです。

作り始めた当初は手元にある材料も少なく、作るものの種類も限られていました。自分や身近な友人へ贈るものだけを作る、今よりもずっとこじんまりとしたものですが、そこはやはり元々好きなもの。いつの間にか増えた天然石などのビーズやパーツは今では二百種類を超え、作るものや種類もその幅をじわじわと広げてきました。組み合わせではバラし、また組み合わせではバラし、頭を捻りながらの試行錯誤を幾度となく重ねながら、マイペースながらも地道に制作活動が続いています。そうして制作したものは、家族が経営するカフェの一角での販売に始まり、オンラインショップでの販売やイベント出店などの機会を得て、現在までに沢山のお客様の

元へ旅立っています。初めて臨むことばかりのこの経験は、私の「表現」に数々の刺激を与え、新たなものを生み出すための原動力や想像力の糧となっています。

こうして改めて自分の所作を見つめ直してみると、自分が良いと思ったものを作り、人様に見ていただき、さらには買っていたなど、とても恐れ多いことだなと、恐縮してしまいます。と同時に、私が作る「Marycocolo」の作品を気に入ってくださるお客様がいてくれることに感謝と感激とが湧き上がり、恥ずかしいような照れくさいような、嬉しくもどかしい、こそばゆい気持ちになります。実を言うと、私は幼い頃からあまり自己表現というものが上手ではありませんでした。そんな自分に自信が持てず、自分で自分を認められず、自暴自棄になったこともありました。随分大人になった今もその根っこは変わらず健在で、素直に自分というものを表現するのはやっぱり下手くそです。私にとって作品を作ることは、自分の中にあるものを現すこと。不器用でいびつな私のそれは、時に恐怖

感を抱く所作です。「Marycocolo」として制作を始めて約三年半、それは今でも抱くものです。

そんな私が、自分の中にあるものを現し、形にし、人様に買ってもらいたいという、今までの自分にとっては無謀とも呼べる所作を行うようになったのは、家族の何気ない一言、たった三文字の言葉がきっかけでした。「売れば？」と。

衝撃の一言でした。なぜなら、この時の私にとって何かを作ることは、ただの自己満足でしかなかったのです。自分の表現として形にするのも、それを誰かに買ってもらうのも到底恐ろしく、「そんなことできない。してはいけない。」と思っていました。結局それは、ただの思い込みでしかなく、自信の無さからくる見えない枷だったのです。

今思えばこの一言は、自分が表現したものを認めてくれた、最初の一言でした。この一言に、枷を外してもらった気がしました。あ、やっていいんだ、大丈夫なんだ、と。

私の「表現」は、時に素直で、時に捻くれていて、その時の私の心の状態を見事に現したものが出来

上がります。後になって冷静に見てみたら、「なんでこんなもの作っただろう…」と思うものも少なくありません。そして、これは人様に受け入れてもらえるのか、私の思いは間違っていないかと悶々と不安と戦い、それに打ち勝った作品だけが日の光を浴びるのです。



私は、この「表現」を通じて、自分という人間の更なる成長を期待しています。自分にしか作れないもの、自分だから作れるものを作り、表現し、認めてもらい、自信とする。それを糧にまた作り、表現する。そうやって積み重ねて

いく日々が、私という人間の成長を助け、ひいては私の持つ個性をも磨いてくれる、と。

そしてその積み重ねの中になくてはならない、沢山のご縁。お客様そして家族はもちろん、見守ってくださる方々の応援は、感謝の思いと共にまた糧となり、私の「表現」へと繋がっていくのです。

様々な過程で種々として混じり合い、唯一無二の表情を持つ天然石たち。私もその石たちのように、私らしさ満点の「表現」という所作をこれからも続けていきたいと思っています。

誰もが何かしらの形で行う様々な「表現」。その「表現」がどうか、皆様の人生を、そして誰かの人生をも豊かにするものでありますように、願いを込めて。

拙い文章を最後まで読んで頂き、ありがとうございます。

なかうち まり

一九八四年生まれ、香南市出身。仕事や家業の手伝いのほか、アークセサリー作家として活動中。

地域と展覧会とカタログ

―高知県立美術館での七年間を振り返って

川浪 千鶴

私が福岡県立美術館から高知県立美術館に移籍したのは、東日本大震災がおきた二〇一一年の七月だった。三月末には約七年間の任期が終了する。そこで、この間に開催された高知県立美術館の企画展から四本を取り上げ、地域文化と展覧会の関係について小考してみたい。

■地域に生きる絵金文化

私が高知の文化としっかり向き合った最初の展覧会は、「絵師・金藏生誕二百年記念大絵金展 極彩の闇」（二〇一二年十月二十八日～十二月十六日）だった。着任早々、初めての宵宮の絵金祭りを見るために、赤岡に連れて

行ってもらったことをよく覚えて

いる。蠟燭の灯りに浮かび上がる芝居絵屏風の生々しさと迫力にま

ず目を見張ったが、芝居絵屏風のある夏祭りの風景が地域の人々の手で長年にわたり大切に守り伝えられていること、絵金作品が「生きた」文化財であることにも感銘を受けた。

絵金とその弟子たちの貴重な作品を一堂に並べ、絵金と祭礼文化を総合的に顕彰するという展覧会の骨格はすでにできあがっていた。途中参加の私は、以後学芸課では展覧会の総合計画やマネジメントを担当し、本展においては高知が誇る絵金文化の豊かさをより多くの人に様々な手段で味わってもら

うことに注力した。

県内各地の祭礼を案内した『絵金ガイドブック』を制作し夏祭りの時期に事前広報物として配布したり、「秋の絵金祭り」として灯明祭りを美術館の開館記念日（十一月三日）に開催するなど多種の普及活動を行ったが、中でも、展覧会カタログを『絵金極彩の闇』と題し書籍出版したことは大きな成果につながったと自負している。作品図版や解説、論文以外に、撮り下ろしの祭礼写真や絵の具や紙を分析した科学調査コラムなども掲載し、バイリンガル化も実現。本書は、絵金文化を紹介する基本図書に位置づけられ、その年の「優秀カタログ賞」に選ばれた。増刷

もを行い、国内外を問わず広く絵金ファンを増やすことに現在も貢献している。

地域文化の価値を磨き上げ、資源化するためには、継続性が保証される、自前の有効なメディアを持つことが重要だと学んだ展覧会だった。

■郷土作家としての正延正俊

画家・正延正俊の初回顧展「没後二十年 具体の画家―正延正俊」（二〇一五年八月九日～九月二十八日）は、兵庫県の西宮市大谷記念美術館との共同企画だった。高知県須崎市出身の正延は、今や世界の具体といわれるほど人気が高い前衛美術グループ「具体美術協会」に長く所属していたことで知られている。しかし、西宮市大谷記念美術館との最初の打ち合わせ会議で、正延を有名な具体作家としてだけではなく、高知と西宮、二つの地域の郷土作家として誠実に検証し評価すること、それが両館の使命であると確認しあい、展覧会の方針としたことは、地味ではあるが極めて重要だったと思

っている。

正延が生まれ二十代を過ごし、絵画の基礎を学んだ場所が高知なら、西宮は教員として働きながら、最期の瞬間まで自身の創作に向きあった場所。画家人生を支えたものとは何だったのか。いつ美術に目覚め、どんな人たちと交流し、何を学び、何を考え、どんなこだわりを持って制作していたのか。

作家の軌跡を丁寧にとどけていく作業は、地域に立脚した郷土の美術館が責任を持つべき仕事といえる。同様の方針で編集したカタログも充実した決定版となった。

展覧会準備を通じて信頼を深め



たご遺族からは、のちに第五回県展（一九五一年）の特選受賞作品など代表作品五点をご寄贈いただいた。展覧会を通じた縁で収蔵された新たなコレクションとカタログは、今後さらなる出会いや発見を生み出してくれるだろう。こうして展覧会と地域文化の関係は循環し発展していく。

■高崎元尚展と岡上淑子展は続く

先にあげた展覧会はどこにも物語作家が対象だったが、最後に二人の現存作家（高崎氏は展覧会開幕から一週間後にご逝去された）の展覧会をご紹介します。九十四

歳の前衛美術家・高崎氏と九十歳のコラージュ作家・岡上氏、最長老の高知在住作家による、どちらも高知県立美術館での初個展。お元氣なうちにそれぞれの個展を開催することが、高知における私のプライベート・ミッションだったので、担当学芸員たちの尽力で夢が叶い感無量の思いだ。

「高崎元尚新作展―破壊COLLAGES―」（二〇一七年六月十七日～七月二十三日）では、入院中の作家から指示を受けながら、展示室に圧倒的な規模の、新作かつ最後のインスタレーションを出現させた。「岡上淑子コラージュ展―はるかな旅―」（二〇一八年一月二十日～三月二十五日）では、一九五〇年代の七年間に集中して制作された、世界的に見ても他に類例のない魅惑的なフォト・コラージュ作品をまとめて展観する初回顧展を実現させた。どちらも、今ここ、高知でしか見ることのできない唯一無二の展覧会として人氣を博し、郷土の美術館が地域美術の再評価に真摯に向き合った例としても高い評価を受けている。

高崎展は展覧会後に、美しい作品写真と詳細な年譜を掲載した記録集を発行。岡上展は、今回展示できなかった海外作品まで網羅した、念願の『岡上淑子全作品』集を出版社から刊行した。どちらのカタログにも、これまで知られていなかった作家の活動履歴や資料、関連情報がぎっしりと詰まっており、カタログはもうひとつの展覧会だという意を改めて強くしている。そして、ひとつの展覧会の終わりは、新たな企画の始まりだということも。

四つの展覧会と四冊のカタログは、私の高知での七年間の活動の記念として、今後も大切にしていきたいと思っている。

かわなみ ちづる

一九五七年 山口県下関生まれ。
高知県立美術館企画監兼学芸課長。一九八一年から福岡県立美術館に勤務。同館学芸課長を経て、二〇一一年から現職。

ロシアの、マトリョーシカと ウオツカ以外の話

文.. 田原 綾乃
絵.. 高畑 慧

みなさまはロシアという国についてどういうイメージをお持ちでしょうか？とにかく寒い、ウオツカをはじめアルコールをたくさん

一緒にロシアで生活した気分になっただけなら嬉しいですよ。

【冷蔵庫は〇〇するもの？】

一面の銀世界…。実は国境的にはお隣の国であるロシア、でもその実、行ったことのある人は少なく、なんだかよく知らないけど少し暗くて寒くてなんとなく怖い、そんなイメージを持っている人もいます。

一月の夕方、気温は氷点下十五度、凍えながら歩いていると「お嬢ちゃん、美味しい果物はありますか？」と声が聞こえてきました。見ると、道端に座ったおばあちゃんが、にこにこしながら、果物の販売をしています。

氷点下十五度の道端で果物を販売している

よく知らない中のひとりでしたが、縁あって半年間ロシアに留学をすることになり、予想だにしない体験をすることになりました。今回は、そんな私が出くわしたロシアのリアルをお伝えできたと思います。

という時点でかなりの驚きかもしれません、既にロシアに数ヶ月滞在した身としては慣れたものの、美味しそうなミカンをいただいで、ホクホクしながら帰路につきました。

帰宅後、早速さつき買ったミカ

ンを食べようかなと大口を開けてぱくつと口へ放り込んだところ、固くてとても噛み切れませんでした。

なんとということでしょう。氷点下十五度の中、売られていたミカンはカチカチに凍っていました。「バナナで釘が打てる」という通説も笑い話ではありません。

この話をロシア人の友達にしたところ、「冷蔵庫に入れておけば解凍されるわよ」との答えが。目からうろこでした。冬のロシアでは冷蔵庫は「冷やすため」ではなく「解凍するため」に使われるな

なんて…。

「とっても非効率？ 究極の「おもてなし」」

滞在中、とある講演会に行く機会がありました。私はロシア語がそんなにできるわけではありませんが、その講演会は「ロシア語からの同時翻訳付き」ということになっていましたので、きつと同時に通訳音声流れるレシーバーが付で配られたり、スクリーンに通訳後の文章が表示されるのだろうと安心していました。

さて、講演が始まる前、開催者



の方がロシア語でこのようなことを言いました。

「この中にロシア語がわからない人はいらっしやいますか？」

ロシア語がわからない人に、ロシア語でこの質問をしても伝わらないのでは…。

それはさておき、慌てて手を上げると、百人ほど参加していたその講演会、ロシア語がわからないのは私一人だけでした。少し申し訳なさを感じながら手を上げ続けていると、ロシア人のご婦人方が近づいてきます。あ、同時通訳用のレシーバーを渡してくれるのかな、と思っていたら、ご婦人方は何も渡すことなくただ私の隣に座りにきただけでした。この時点で、頭の中に「???」マークが沢山。結局、どのように同時通訳が行われるのかは明かされないうまま、講演が始まってしまいました。すると、

「いま、あの講演者は、（？）と言っているわよ」（翻訳された言葉で）

と小声でご婦人が囁いてきます。「えっ?」ふいに起こった展開に着いていけない状態。そんなことはおかまいなしに、ご婦人はその後もずっと私の耳元で講演内容を

を囁き続けます。右隣のご婦人、後ろのご婦人、左隣のご婦人、みんなが順々に私に囁きます。あ、この囁きがひよつとして同時通訳?! え、こんな耳元で囁いてくれるの?! とようやく気づき、その後二時間、ご婦人方のおかげで講演内容の理解を深めることができたのでした。

とにかく強い! ロシアの「ゴミ箱」

これは、ロシアに来て早々に感じたことです。

ロシアのゴミ箱は強い

一体何を言っているんだ、と思われた方に、ロシアのゴミ箱事情をお伝えしましょう。

ロシアでは道端のゴミ箱がよく燃えている

街中ではちとゴミ箱が燃えているのです。最初に見たときは思わずびくりました。周りの人たちはまるで気にせず素通りしていきます。道端で炎が上がっているのを見てなげ平気なのだろうと思いましたが、タバコの火の不始末からゴミ箱が燃えることはしばしばあるようで、ロシアのゴミ箱は分厚いコンクリートの頑丈な作りになっています。

日本でこのようなことが起こる

と、「タバコの火は最後まで消しましょう!」と注意喚起が行われそうなものですが、ところがロシアでは「燃えても大丈夫なように、ゴミ箱を強化しよう!」という発想になるようです。

…いかがでしたでしょうか。

ここまでのエピソードは笑い話のようでもあります。日本に住む私にとつて、実は様々な示唆を与えてくれるものでした。

外気よりも冷蔵庫の方があたたかいという状況は、日本の気候ではなかなか起こりません。でも場所が変われば、同じ家電でも果たす役目が変わります。自分の中の「常識」が脆いことを知りました。

講演の聴講者に対して、自身の同時通訳者を付けることは、非効率にも思えます。でも、小規模な講演会では、高価なレシーバーや同時通訳スクリーンを設置するよりも、同時通訳者が寄り添った方が効率がよく、費用が抑えられるかもしれません。なにより、効率性以上に、私にとつてはその講演会がとても思い深いものになりました。難しい箇所をどう訳すべきかと同時通訳者のご婦人方間で相談が始まった時は、ロシア語

がわからないことを申し訳なく思いつつ、でもその気持ちがとても嬉しかったです。休憩中には一緒に雑談をして笑い合い、講演終了後は笑顔でお別れました。

ゴミ箱にしても、「失敗を罰する」のではなく、「人間なので失敗することもあるよね」と失敗を受け入れる姿勢に学ぶことも多いように思います。他人にも自分にも寛容になって肩の力を抜くことができる気がします。

などと、今年の厳しい寒さにひやひやいと縮こまりながら、ロシアで過ごした日々が思い出されて、ちょっぴり心が暖かくなるのでした。

たはら あやの

平成元年生まれ。小・中・高と高知で過ごし、東京大学大学院在学中の二〇一四年〜二〇一五年にかけて交換留学生としてロシアのサンクトペテルブルク大学にて学ぶ。昨年は仕事で三度ロシアを訪れる。散歩が趣味。

たかはた さとし

平成元年生まれ。デザイナー。街灯の写真を撮るのが趣味。

子ども食堂の 広がりについて

泰泉寺 あや

二階を借りられるようになった。開催日は第二、第四日曜日の昼間。参加者には波があり、少なかったり百名を超す時もあった。

月一回の開催ではイベント的で、もっと本当に必要としている子ども達に届けたいと思っていた。その年の十二月に、初月地区の公園で夕方になっても五十名くらいの子も達が遊んでいると聞いて行ってみた。小学五年という女の子に話を聞くと、お家の方は七時か八時にならないと帰らないので、自分で夕食を作っているとの事。「よし、わかった。おばちゃんが学校の早く終わる毎週水曜日に子ども食堂するき、食べに来いや」と思わず言っていた。

全く自信もなくはじめた『水曜校時カフェ』。場所は地域交流センター城北の二階。はじめは周知が足りなくて、なかなか子ども達も来てくれず、毎回チラシ配りをしていた。

急に参加者が増え始めたのは『万々の良いところを見つけよう』という授業で、初月小の子ども達

思い起こせば二〇一六年の一月。地域のもちつきイベントに、冬なのに薄着の三兄弟が百円玉を握りしめて参加していた。思わず「お父さん、お母さんは？」と聞くと

うことや、困った時に相談できる大人がいなくてひとりぼっちでいる、関係性の貧困も含まれる。

「家でゲームしゆう」と。その後、その子ども達の家は割と大きな家で、外車もガレージにあるという情報が入り、『見えない貧困』という言葉がぼんやり浮かんだ。

その後半年が経ち、「自分はシングルマザーで子どもを育てているが、子ども食堂をするのが夢だ」という若いママに出会った。全く見通しもなかったが、とりあえず「やってみよう」という事で始まった。

『見えない貧困』には、相対的貧困とも言われる経済的な貧困だけでなく、遊ぶ・学ぶ・文化に触れる等の出会いや経験が減ってしま

まずは地元の小高坂、初月地区から始めようと万々商店街にある『地域交流センター城北』の二階を借りることになった。地域の為

にと医療生協が快く会場を提供してくれた事で順調なスタートを切ることができた。

八月のプレ・オープンの様子を高知新聞が取り上げてくれて『高知ではじめての子ども食堂』はオープンした。「新聞を見た」と次々とボランティア希望者が集まり、食材の提供者も現れ順調なスタートとなった。テレビ、ラジオで大きく報道してくれた事も大きな後押しになった。

九月には同じ生協つながりで、吉田町にあるCOP吉田店の

が子ども食堂を選んでくれ、全校生徒の前で発表してくれてからだ。と同時に、夏休みの子どもの居場所作りにと『夏カフェ』と銘打って、朝から夜まで開催した事も良かったと思う。

六月頃には、帯屋町の居酒屋さんから三階のフリースペースを子ども食堂に提供しても良いという話が舞い込んでくる。帯屋町には『プリンク』という県の思春期相談の機関があって、以前は日に百件の相談があったらしいが、今は機能を果たしていないと聞いた。「もし子ども食堂で思春期のお悩み相談等もできたらいいよね」という事で、月二回借りる事になった。店主の方も、自分が思春期の時に助けてくれた人がいたから今の自分があるので、今度は自分がお返しする番だと、熱く語ってくれた。

これで月に八回、子ども食堂をすることになった。ただ必要に迫られるように、何かに後押しされるように広がっていった。

県の子ども食堂への期待と支援

は大きく、高知県下の小学校区単位に一つ以上の子ども食堂の設置を目指し、立ち上げ・運営支援や助成制度という形で取り組みが進んでいる。そして、社会福祉協議会の職員の方々には、地域の方々につないでもらったり、ボランティア、食材集めと随分助けてもらった。

子どもの貧困は、国内市場の縮小や社会保障負担の増加など経済への影響も大きく、「子どもの貧困は、私達一人一人の問題だ」という同じ思いの仲間が集まり、「何とかしたい」という思いの方々による支援の輪がどんどん広がりがつていき、高知県下に五十ヶ所以上の子ども食堂が開設されるようになった。

子ども食堂と一口に言っても、地域により、ボランティアの思いにより多様な形でオープンされている。それが子ども食堂の良いところであり、面白い活動だといえる。

今後ますます加速度的に子ども食堂は増えていき、子どもの貧困

こども食堂KOCHI活動紹介

毎月第2日曜日	こだかさカフェ	11:30~14:30
毎月第4日曜日	あたごカフェ	11:30~14:30
毎週水曜日	水曜校時カフェ	16:00~19:00
毎月第1第3金曜日	帯カフェ	16:00~19:00

こども食堂を開いています。

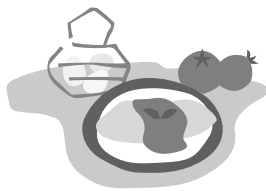
※チラシを参照ください



を何とかしようとする動きは止まる事はないだろう。それだけ子ども達のおかれている現実が厳しい。子ども食堂もこれから時々に応じて形を変えながら、子ども達や地域の方々にあたたいご飯とみそ

汁を提供していく。

「貧困の子どもも来ていますか？」というの、開設当初によく聞かれた質問だ。最初はなかなか子ども達のおかれている現実が見えなかったが、今振り返ると、やはり本当に子ども食堂を必要としている子ども達は来ていた。しかし、まだまだ実態に対応しきれていないと思う。一人でも多くの「何とかしたい」気持ちのある仲間が集まり手をつないでいくこと、それが私達に与えられた課題だと思う。



じんぜんじ あや

高知市在住。

こども食堂KOCHI実行委員会代表。

問い合わせ

〇九〇―三九八八―四一二〇

「アンテナ」

にこみちゃんとの出会い



下尾 仁

周波数を合わせば、いろんな人と出会い繋がることができる。アンテナを高くたて沢山の人と繋がろう。すると、面白いことがやってくる。

かるぽーとの西隣にある小さな飲み屋「にこみちゃん」を知っていますか？

僕がにこみちゃんの大將、河原崎さんと出会ったのは、今から八年前、職業訓練校「住宅リフォーム科」に通っていた時のことである。リフォーム科とは、ノコの引き方からノミ、カンナの研ぎ方パソコンでの図面製作、家を一軒建てリフォームしていくという授業を、半年かけて行っているところだ。

その日の授業は「継手」。木をノミ、ノコでオス、メスのかたちを作り、カチツとはめこんでいくというものだった。

継手の授業が終わり休憩になったとき、一人の生徒に五、六人群がっていた。なんだろうと覗きこんでみると、作った継手がきれいにはまらず無理矢理ハンマーで叩き入れているところだった。そしてその瞬間、せつかく作った継手は、バキッという激しい音とともに皆の目の前で折れてしまった。僕はなんとも不器用な人があるものだと思った。その継手を折ったのが、にこみちゃんの大將、河原崎さんである。それから少しづつ話をするようになり、仲良しくしてもらうようになった。

そんなある日、僕の演劇仲間から高知城であるキャンドルイベントのお手伝いをするため、人を集めてほしいと依頼があった。僕はすぐに河原崎さんをお願いしたら、快く引き受けてくれた。イベント当日、受付で名前を名乗ると、受

付をしていた演劇仲間が、「河原崎って、ひょっとして河原崎長一郎って知っちゃう？」と冗談ぽく話しかけてきた。すると、なんと河原崎さんは「父です」と言った。河原崎長一郎といえば、映画やテレビドラマに多数出演している、知る人ぞ知る名脇役である。演劇仲間は、「え〜〜〜〜うそやろ〜」とびっくりたまげていた。

まさか名字が同じなのでしょつと聞いてみたところがビンゴである。だからといって特別扱いになるわけではないのだが……。すごい人の息子だという事はわかった。職業訓練も終盤に差し掛かり、皆が仕事探しを始めたころ、河原崎さんは飲み屋をやると言い出した。しかも手作りで。住宅リフォーム科に行ったのは、まんざらでもなかったようだ。リフォーム科で出会った仲間たちが手伝い、にこみちゃんは生まれた。

(僕は手伝っていない)

店がオープンして飲みに行ったりある日、河原崎さんは一人であまりの忙しさにあたふたしていた。見かねた僕は、手伝っていい？と皿洗いをさせてもらった。平日はお手伝いがあるが、日曜は一人でやっているとの事。もしよかつ

たら日曜日手伝いにこようか？と言ったら、河原崎さんはお願ひしますということで、僕は日曜ににこみちゃんのお手伝いをする事になった。

にこみちゃんでの河原崎さんは初めて会ったときの不器用な人とは真逆で、手際よく料理を作り、まさに大將である。

オープンして約八年の今では、なかなか座することも出来ない程の人気店である。

ちなみに僕は、よつぽどお手伝いがいない日、年に一回か二回ぐらいお手伝いさせてもらっている。ほんとともっとお手伝いに入りたい。だってにこみちゃん大好きだもん。



しもお ひとし

一九六九年生まれ
岡豊高校一期生。二十五歳ぐらいに演劇に目覚め、日夜面白い事はないかとキョロキョロしている。

「学びの楽しさ」を伝える ことについて

岡崎 正哲

私は、「学びの楽しさ」を子ども達に伝えるために高知で「宇宙サイエンス実験教室」を開催しています。

サイエンス（科学）、テクノロジ（技術）、エンジニアリング（工学）、英語、芸術、数学を好きになるためには、その楽しさを体験することがとても大切だからです。それは、身の回りの森羅万象を「再発見する」「ワークシヨップ形式で」「宇宙」を題材にした科学実験とワクワクする映像で構成されています。

一例をあげると、ペットボトルに水素ガスと酸素ガスを入れて、圧電素子で点火、化学反応で「バーン!!」と激しい音を立てて小さな爆発を起こし、ロケットが目の前を勢よく飛んでいく様子を生で目撃してもらったりしています。

この仕組みは、種子島から飛ぶH2ロケットと基本的に同じ原理です。

そして、発射実験直後のペットボトルを手にとつて、爆発の熱と水蒸気中が曇っている様子から水のひみつも発見してもらいます。

また、真空の宇宙ではSF映画の効果音のように「音」を立てて宇宙船が飛ばないことも実験で確認してもらったりします。

糸電話を作つて遊んだことがある子ども達は、音は空気の振動だと知っていますが、実際に蓄音機で声をプラスチックコップに録音して、お友達の声が目の前のコップから再生されると、大人でさえも目を丸くして驚いてくれます。

デジタルが当たり前の世代には蓄音機の仕組みを新鮮に感じるので、コップに刻まれた波形を針がなぞつてコップのそこを揺らし音が再生することを目撃すると、波形が情報を伝達するのに役立つコトを子ども達は「発見」します。

これらは、デジタル情報を操るコンピュータや光通信の基礎科学の入り口として最適な教材になります。

ます。

このような様々な楽しい実験を体験して、好奇心や探究心を育むことは、この世界を自分なりに理解して応用しようとする気持ち芽生える時期には特に重要です。

また、自分の能力をどんどん高めようと新しいコトに挑戦したり、発見することに夢中になれる時期なので、ロケット工作のワークシヨップなども、モノづくりへの関心も高めてくれることに繋がるのです。

同時に、保護者の皆さんはお子さん達の本来持っている潜在能力や普段見せない好奇心や探究心に気が付くきっかけにもなり、うちでも図鑑やネットで科学の学習を継続発展させるチャンスにつながっています。

さらに、保護者の皆さんご自身も、子どもの頃の実験や工作の楽しさを思い起こして、お子さん以上で夢中で挑戦している姿をよくお見かけします。学ぶことの楽しさを親子で体験すると、お子さんが与えられる学びの選択肢も広がる事が期待出来ます。

生まれた頃からスマホのようなデジタル端末が当たり前、ネットを介して多様な情報コンテンツに囲まれた世の中で、遅く生きて行かなければならない現代の子ども達にとっては、学校で教えてくれる知識の質と量は圧倒的に物足

りず、主体的に自分で考える体験もなかなか与えられてないのが現状ではないでしょうか？

スポーツや音楽、ゲームのように、夢中になれるコトにならずとも達は、とてつもないエネルギーを発揮して、想像を絶する努力も惜しみません。

繰り返になりますが、現代は、好奇心と探究心さえあれば知識にはいくらでもアクセス出来ます。アジアや西洋諸国の多くでは、そのような学習環境が整い子ども達は好奇心に任せてどんどん学習を進めているのが現実です。

社会の変化に対応して、自らが新しい解を見つける探究力を身につけるためにどのような学びが必要なのか？ 勿論、その答えは一つでは無いでしょう。

主体的に学ぶ喜びを体験させてあげるコトは、その一つの答えだと私は考えており、「宇宙サイエンス実験教室」を出来るだけ多くの子ども達に届けたいのです。

おかざき まさあき

高知市在住。

ディスカバリーメディア Founder。
宇宙サイエンス実験教室主宰。

1 月の事業から

平成二十九年 度公共ホール現代ダンス 活性化支援事業

「公共ホール現代ダンス活性化支援事業」は公共ホールの活性化や芸術活動の環境づくりを目的に一般財団法人地域創造が行っている助成事業のひとつで、コンテンポラリーダンスのアーティストによる公演と、アーティストが地域の様々な団体や場所に出向きダンスを通して交流を行うアウトリーチ及び公募で行うワークショップからなる「地域交流プログラム」で構成されています。今回、私たちは「表現」を楽しむきっかけづくりをねらいとし、振付家・ダンサーで、全国各地で市民参加のダンス作品制作を手掛けてきた山田珠実さんと本事業を実施しました。

地域交流プログラムでは、普段の生活では見過ごしがちな「自分の体」を意識するという目的のもと、高知大学演劇研究会、土佐中学高等学校音楽部（合唱）、高知追手前高等学校舞蹈部の三か所で、それぞれの



高知市文化振興事業団サポーターズクラブのご案内

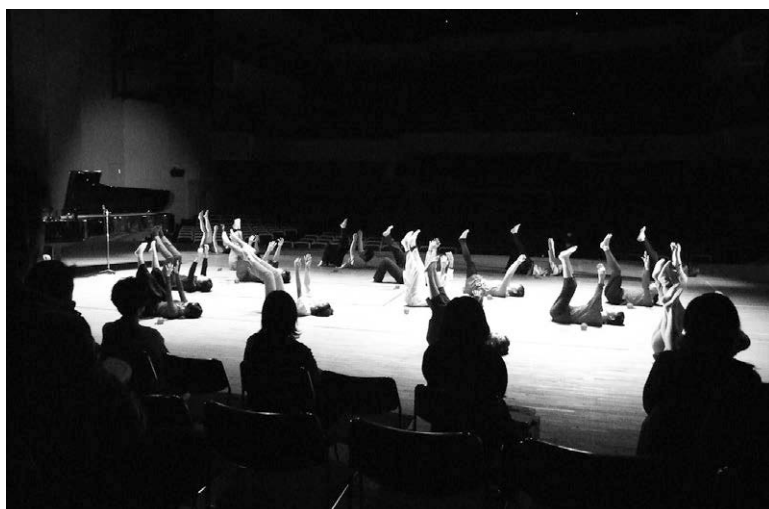
Cul^{カル}チャーず

多くの方の入会をお待ちしております。私たちの文化を、一緒に創りましょう！

特典 ①年間1公演招待 ②公演チケットの割引販売 ③横山隆一記念まんが館企画展招待 ④「文化高知」の送付
会費 1年間3,000円（4月1日～3月31日、年度途中での入会でも3月31日まで）

お申し込み・お問い合わせは、高知市文化振興事業団 088-883-5071 まで

高知市文化振興事業団



部の活動を意識した内容のストレッチ方法や体の使い方を体験するアウトリーチを実施しました。公募ワークショップは『カラダについての基礎の基礎』と題し、集まった十代から八十代までの様々な年代の方たちに音楽やリズムに合わせ楽しく体を動かしてもらったり、人体の模型や図を示しながら関節や骨の動きに関するレクチャーを行いました。

一月二十一日には、かるぽーと大ホールでダンス公演「人体について」を上演し、山田さんのほか二名のダンサーと音楽家が出演。また市民の方にも現代ダンスを体験してもらう機会にするべく、公募でエキストラダンサーを募集。十六名の市民参加ダンサーズが、わずか四日（のべ十五時間程度）という短くハードな稽古を乗り越え、山田さんらとともに渾身のパフォーマンスを披露しました。

身体、言葉（朗読）、音楽という色々な手法を用いて「人体」の不思議さ、儚さ、力強さなどが表現された本作品。演出面でも会場である大ホールの舞台上に客席を設置し、舞台上以外に本来の客席部分もダンスのアクティンゲリアとして使用するなど、普段のホール公演とはひと味もふた味も違う面白い作品となりました。私たち主催者にとっても、様々な面で今後の文化事業展開の可能性を探る貴重な機会となり、得られた成果と課題、市民参加者らの感想などを今後に十分生かしていきたいと思います。

「アウトリーチ参加者数【三団体延べ】三十三名、ワークショップ参加者数二十名、公演入場者数三十二名」

高知市文化振興事業団 出版物のご案内



珍聞土佐物語 一五十人の語り部たち(上巻・下巻) — 依光 裕 編著

土佐の山や海辺の村の囲炉裏端で古老が語った地元の伝説や小咄の数々。上巻では地域別に二十名の語り部の百三十話を、下巻では三十一名から寄せられた百二十話を採録。親から子へ、孫へ語り継ぎたい「ふるさと」がここにある。（平成五年刊）

価格各 1,677 円（本体価格 1,553 円＋消費税）

— 郷愁に泣き笑い。おおの、おんちゃん! たまらんちや!

読み物から研究書まで。地域の芸術・文化に関わりの深い書籍たち
高知市文化振興事業団出版物 詳しくはホームページまたは088-883-5071 へ

幸せって？



風俗歳時記

男性社員にどんどん先を越され、心の中で密かに腐っていたこの一年。ふと、「幸せって何だろう」と考えてみた。人に褒めてもらうことが快感で、勉強、音楽、ダンスなどいろんな分野にも熱中した幼少期。大学に苦勞して入学し、卒業後は念願だった職種につき、辛いことは多々あったものの生き甲斐を感じた社会人前半期。子育てを通して追体験し、子どもたちが頑張る姿に、自分の夢を乗せた母親時代。しかし近頃はなんかつまらない。会社での出世の方が頭打ちなのだ。均等法世代といわれる同世代の女性たちは、上場企業で役員になったり、世界に影響を与える人になったりしているのに。

ここで自問するのは、「出世は、幸せなのか」。

六十歳の定年後、多くの企業は一年更新で六十五歳まで雇ってもらえる再雇用制度を導入している。管理職と元上司の立場が逆転し、後輩職にこき使われることもある。リタイア組を見ると、役職が上だった人より、そこそこだった人の方がなんだか明るい。「定年前までは、出世！と思ってたけど、退職すると皆一緒。フラットだよ」と笑って飛ばしている人も。現役社員としてはその境地まではいかないが、何となくその気持ちも理解できる。

若い頃に取材していた人たちが、次々

リタイアの年を迎え、農業に従事したり、ハンターになったりして楽しそうに人生を送っている。職人は定年がないので、高齢になっても粛々と自分の技を磨き続けている。そんな人たちが、昔と同じように声をかけてくれ、ご自身の力作を惜しみなくプレゼンしてくれたりする。肩書で知り合った人同士、リタイア後にわざわざ会ったり、継続して交流があるとは限らない。そう考えると、出世なんて糞くらえ！と言いたところだが、まだしばらくは、うだつの上がらない会社社員生活は続く。

(立花香)



高知を撮る

第33回写真コンテスト入賞作品

ふるさと～沖の島

田所 睦三

(①昭和37年1月 ②昭和36年12月 ③昭和37年1月 宿毛市沖の島町)

離島特有の環境の元で育んできたふるさとへの思いをテーマとして組んだ。

①正月に兄弟であげた風揚げは忘れられない思い出。

②燃料の薪の調達。運搬は女性が受け持ち、島の厳しい生活はみんなで助け合って暮らしてきた。

③学校を卒業すると、みんな島外に仕事を求め島を出ていく状況にあった。古里との別れは万感胸に迫るものがあったことだろう。

第70回特別記念高知市文化祭開幕行事

土佐の息吹

鼓童と舞踊による芸術の融合



佐渡に拠点を置く太鼓芸能集団「鼓童」を中心にした二部構成の公演。
一部は、鼓童による大太鼓演奏。二部は、鼓童と高知で活躍するダンサーによる舞台「KOSHOU」(コウショウ)を披露します。
総勢70名以上の出演者による魂を揺さぶる舞台をお楽しみ下さい。

日時: 2018年4月8日(日)

【昼の部】13:00開場 13:30開演 【夜の部】17:30開場 18:00開演

会場: 高知市文化プラザかるぽーと 大ホール

料金: 全席自由 前売り 4,000円(当日 5,000円) ※未就学児の入場はご遠慮ください

お問い合わせ 高知市文化振興事業団 088-883-5071

第34回

写真コンテスト 「高知を撮る」 入選作品展

このコンテストでは、毎回「高知」をテーマにした写真を募集しています。

今回は「記録写真部門」と「I LOVE 高知部門」にご応募いただきました 253 点の作品の中から、審査で選ばれた特選 4 点、準特選 20 点を含む、入選作品 67 点を展示します。

高知の懐かしい風景や出来事、人々の暮らしを記録した写真や、撮影者の好きな高知を写した作品など、様々な高知の姿を是非ご覧ください。

■日時

3月20日(火)~25日(日)

10:00~17:00

※20日10時より表彰式を行います。

■会場

高知市文化プラザかるぽーと
7階市民ギャラリー・第4展示室

■入場料

無料

■お問い合わせ

高知市文化振興事業団 088-883-5071

風伯

「身体の整い」

前回の続きのような話になる。顔の整いも身体の整いも違いはないように思えるから。実は私、長年パソコンの前で仕事をしているせいもあってか、猫背がひどいようである。というのも、自覚があるわけではなく、周りから「背中が曲がっている」「肩が入っている」「姿勢が悪い」といわれるので間違いないだろう。

身体の整いからはほど遠く、姿勢が悪いと疲れやすいし、集中力は続かずやる気も削がれる。持てる能力もじゅうぶん発揮できない。最近足腰が弱くなつて足の運びさえおぼつかなくなる。まさに今の人たちに多い現代病を患っているのだ。

あの羽生選手演技を観ていて大いに感嘆させられたが、よく見ていると

身体に一本まっすぐに筋が通っていて身体がぶれていない。体幹とてしまつと、なにか筋トレがつきまとうてしまつが、身体の姿勢のありようと体幹は大いに関係しているようで、身体に芯が通つていると整つて見え美しささえ感じる。身体に本芯が通つていると地に足が着き、頭は天に、足は大地に根が生えたように安定してみえる。あの仏陀も身体に芯が通つていて、足裏の渦巻きのような文様が地面に残つたのだといわれている。

姿勢が良いこと、体幹がしっかりしていること、身体がまっすぐ整っていること、大事なことは分かっているがなかなか直せない。猫背が病だという自覚がないからだろう。身体なのかなの目に見えない芯のようなものこそ、二足歩行の人間が人間として生きていくための基本線であり、無限の可能性を高められる力なのだろうと、このごろ反省しきりである。

(霖)

今号の表紙

「春の色」

中屋 未来

だんだんと温かくなってくる春という季節を、暖色である赤色から春の花である桜の色に段階的に変化させました。

また、桜や春から感じる「儚さ」や「柔らかな印象」を右側のかすれで表現しました。

(なかや みく／

国際デザイン・ビューティカレッジ1年生)

報われません、土佐弁 Ver. 勝つまでは

MUKUWAREMASEN KATSU MADE WA

VS

現役 高校生版

かつて 高校生だった 者たち版

どっちも観たらえい!

ON 2018 3.24.SAT 25.SUN [全6ステージ]

高知市文化プラザ かるぽーと